

同じ地球に生きる仲間として		井上 文裕 横浜市立洋光台第三小学校
◆担当教科：社会	◆実践教科：総合	◆時間数： 10時間
◆対象学年：5年	◆対象人数：27名	

◆指導案

○実践の目的

異文化理解

・タンザニアの文化や国の様子などを知り、タンザニアについて興味・関心をもつ。

相互理解

・スカイプというツールを通して、タンザニアのウィロレーシ小学校の児童と通じ、お互いの国や文化などについてのことを話し合う。そして、自分との違いや共通点を見つけ、それぞれの良さを認めることができる。

国際理解

・タンザニアの人々の暮らしや文化などについて調べるとともに、現地で行われている支援活動について学習する。青年海外協力隊員の話などを通して支援とは何かについての考えを深める。そして、今、自分にできることはないか自己に問いかけ、それぞれの考えをクラスで共有する。

共生の意識

・世界には様々な人々がいることを知り、同じ地球に生きる仲間としての意識を高め、国際社会に対応できる人材を育成する。

○授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	「タンザニアといえば？」 ねらい：ブレインストーミングを行い、タンザニアという国を聞いて、感じたことを書き出す。	①タンザニアについての情報を児童には伝えずに、それぞれの児童がありのままのタンザニアのイメージを書き出していく。 授業構成の最後の時間で、同じ質問を行い、最初自分たちがイメージしていたものとの違いについて考えていく。	・画用紙 ・マジックペン
2 ～5	「つながろうタンザニアと日本 ～かがやけ友情プロジェクト～」 ねらい：①タンザニアの国や学校についての事を知り、特にウィロレーシ小学校の事について理解を深める。 ②ウィロレーシ小学校との交流計画をたてる。友だちになるためにはどのように交流していくかを考える。 ③スカイプを使つての授業を行う ④スカイプ授業の反省	①タンザニア研修の画像・映像を通して、実際の現状を把握する。 また、フォトランゲージの手法を用いて、自分たちが考えたことを発表していく。クイズも用意して児童の興味・関心を深めていく。 ②友だちになるためにはどうすればよいか、ということテーマに考えていく。 ③スカイプを使つての授業で、お互いの質問を声や紙に書いて伝える。 ④スカイプを使った授業は成功だったのか、友だちはできたのかということ視点として話しあう。	・視聴覚機器

6	「私たちは日本代表」 ねらい: 日本のことを正しく伝えるために、改めて日本のことを調べよう	①スカイプでは伝えきれなかったことについて話し合う。自分たちを日本代表を称して、日本の良さを正確に伝えるために、日本の伝統文化について調べ上げていく。	
7	「貿易ゲームを体験しよう。」 ねらい: 先進国と開発途上国の格差を自ら体験することにより、国際理解を考えるきっかけとする。	①各グループに分かれて、貿易ゲームを行う。最後に、獲得したお金を発表する。 ②ふりかえりカードに感想を記入する。	定規・はさみ・分度器・鉛筆・紙・ゲーム用のお金・記録用紙
8	「貧しさの輪から抜け出す方法を考えよう」 ねらい: 貧しさの原因と原因が繋がっていて、悪循環を生みだしていることに気付き、貧しさの輪を断ち切る方法を考えることができるようにする。	①「貧しさ」を出発点に、6枚のカードを並べて、悪循環に気づく。 貧しさ→水がきたない→病気にかかる→薬が買えない→病気が悪化する→亡くなってしまふ ②自分が貧しさの輪の中にいたら、自分ひとりの力で、その悪循環から抜け出せるか考える。考えた方法を班ごとに発表していく。	・模造紙 ・マジック
9	「つながろうタンザニアと日本～かがやけ友情プロジェクト～」 ねらい: ウィロレーシ小学校との交流を再度行うことによって、さらに親交を深める。	①一回目のスカイプでは伝えきれなかったことをメインにして話し合う。	・視聴覚機器
10	タンザニアといえば？ ねらい: 1時間目の自分の答えと比較し、考えの違いの変化について考えていく。	授業を通じて、様々な情報が児童に入り、多様な価値観を育てていった。最初と最後で、質問は同じであるにもかかわらず、答えがなぜ違うのかということを理解していく。	・画用紙 ・マジックペン

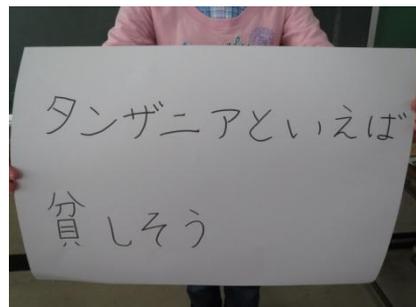
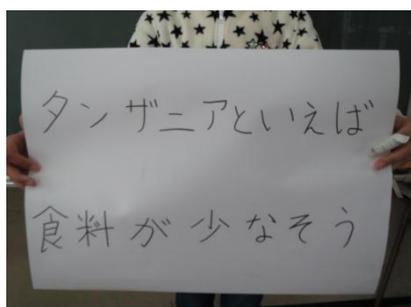
◆ 授業の詳細

1時間目 「タンザニアといえば？」

この授業案の導入の授業として、タンザニアについてのブレインストーミングを行った。事前にタンザニアについての情報を子どもたちには与えず、今の自分たちが考えているタンザニア像を考えさせ、発表することによって情報の共有化を行った。具体的物(写真、お土産品)がないことによって子どもたちの創造力が広がり、様々な意見を出すことができた。

子どもたちが考えるタンザニアは、貧しさを象徴するようなものも多く見られ、「タンザニア = 貧しい」というイメージをもっていることが浮きぼりになった。少数派ではあるものの、中には家族愛などについての肯定的な意見もでるなど、物質的な豊かさとは違う切り口で話している意見も見られた。

この授業案の最後の授業では、同じ学習問題「タンザニアといえば？」の授業を行い、様々な情報を手に入れた後に、どのような意見の変化が出ているのか試みようと考えている。



子どもたちの気付きや感想

貧しさをイメージしている意見（24人/27人）

- ・私はタンザニアといえば、「服をあまり着ていない」と発表しました。理由は、貧しい国はあまり服を着ていないと聞いていたことがあるからです。それによくテレビなどでよく貧しい国の人たちがあまり服を着ていないのを見ることがあるからです。
- ・国民同士が戦争をしていそう。アフリカの内戦に関するニュースを見たことがあるから。
- ・変な病気にかかりそう。医者の野口英世さんはアフリカで黄熱病で亡くなったから。
- ・靴をはいていないと思う。
- ・水が汚い。
- ・食料があまりない etc...

豊かさをイメージしている意見（3人/27人）

- ・家族とのかかわりが深そう。
- ・兄弟が多そう。にぎやかで楽しそう。
- ・資源が少なそうなので、自然を上手に使っている。

◆ 授業の詳細

2時間目 「つながろうタンザニアと日本 ～かがやけ友情プロジェクト～」

1時間目では、タンザニアについての情報を全く与えず、意見を出し合ったが、2時間目では、タンザニアの情報をフォトランゲージの手法を用いて、タンザニアについて子どもたちの興味・関心を深めていった。また、クイズを用意して子どもたちを引き付けることができた。



タンザニアンフード

この魚は、加工されてから日本に輸入され、君たちの元に届きます。さあ、この魚はどんな食べ物になるでしょう？

答え マクドナルドのフィレオフィッシュ



ミクミ国立公園にて



タンザニアの水事情（イフンダ中・高等学校）

子どもたちの気付きや感想

- ・食べ物の種類がたくさんあっておどろいた。
- ・肉を炭火で焼いている。バーベキューみたいでおいしそう。外で料理しているけど、キッチンはないのかな？
- ・ダルエスサラームには、高いビルがたくさんあった。まるで横浜みたいだ。わらでできた家を想像していたので、びっくりした。
- ・やっぱり動物が多かった。ゾウやキリンの他にどんな動物がいるのか調べたい。

◆ 授業の詳細

3～5時間目 「ウィロレーシ小学校とスカイプ授業をしよう」

2時間目では、タンザニアの学校も写真や映像を用いて紹介した。自分たちの学校とは全く違う学校を見るその眼差しは真剣そのものであり、他の町や建物を見る顔つきとは違っていた。

「タンザニアの学校と交流とかできたらいいね～」と思わせぶりに、子どもたちに話しかけてみると、「ぜひやりたい。」「タンザニアの友だちがほしい。」と返答があった。実際にはタンザニアに行くことはできないので、それではスカイプを使って、顔を見合いながら交流をしようという運びとなった。交流を行うウィロレーシ小学校は、青年海外協力隊員である満永大貴隊員の勤務地である。満永隊員とはタンザニア研修の時に、JICA タンザニア事務所よりご紹介していただいた方でスカイプ授業の申し出を快く受け入れてくれた。

ウィロレーシ小学校の子どもたちと友だちになるには、どうすればよいのか？というのがスカイプ授業の入り口の学習問題であった。友だちとはどういった状態のことを言うのだろうか？道徳的な視点も組み入れて交流計画を立てていった。子どもたちが立てた交流計画は、自分の名前、年齢、趣味などを質問するというのが多数をしめていて、友だちになるという目標からは、程遠いものであった。この時点で第1回のスカイプ授業では、お互いの顔を見合わせて話すだけでのものとなることが予想できていたので、第2回のスカイプ授業を視野に入れながら、多くを求めない交流計画に修正していった。

スカイプ授業では、ネット環境が整い、映像などもあまり途切れることなく交流授業を行うことができた。タンザニアとつながった時の感動は子どもたちにとって忘れられないものになったであろう。歓声が教室中に響き渡り、大喜びする姿からそう確信した。お互いの子どもたち同士が質疑応答の形で授業は進行し、特に「友だちになろう」というめあては達成されなかった。最後は、満永隊員のパソコンの電源が切れて終了した。(ウィロレーシ小学校には電気がないため、充電ができない)。

子どもたちの中には、日本のことをちゃんと伝えられなかった、という心残りがあり、改めて日本のことを調べてみようという運びとなった。



子どもたちの気付きや感想

- ・僕がスカイプ授業で感じたことは、タンザニアはアフリカの国なので貧しいと思っていたけれど、画面を通じて感じたのはそこまで貧しくないという印象を受けました。イメージだけで考えていたので申し訳ないと思いました。
- ・時間が足りず思ったような質問ができませんでした。タンザニアの食べ物について質問したかったんですが・・・
- ・「友だちになろう」というめあては時間が少なすぎて、達成できませんでした。

◆ 授業の詳細

6時間目 「わたしたちは日本代表」

スカイプ授業では日本の良さを伝えきれなかったので、改めて日本について学習をした。ウィロレーシ小学校の子どもたちに何をしてほしいのかということテーマにして的をしぼった。グループを4つ作り、グループごとに何を調べ上げるのかを話し合った。グループは以下の通りである。

- ① 文字文化グループ(文字の歴史や、まめ知識クイズをまとめる。習字についても調べる。)
- ② 食文化グループ(米文化、わら細工、主食つながりでタンザニアのウガリも調べる。)
- ③ 学校文化グループ(お互いの学校について調べる。)
- ④ タンザニアグループ (友だちの国について調べる。)

この学習を本校の文化祭にあたる、「ケヤパまつり」で発表した。詳しい内容は、タンザニアの学習と少し離れてしまうので割愛する。

◆ 授業の詳細

7時間目 「貿易ゲームを体験しよう。」

貿易ゲームを通して、世界経済の成り立ちに気づき、格差社会について考える。

貿易ゲームの進め方は以下の通りである。

1 ゲームの目的

紙を使って「製品」をつくり、「マーケット」で売って、できるだけ早くたくさんお金をかせぐこと。
グループで話し合いをおこなってゲームを進めてください。

2 お金

小さな算数ブロックが 1万円

数えぼうが 10万円

3 ルール

- ・渡された物しか使ってはならない。
(自分のハサミや鉛筆、紙などを使ってはならない。)
- ・「製品」は、ハサミを使ってきれいに切り、決められたとおりの大きさになっていなければならない。
- ・「マーケット」で「製品」を売る時は、必ず3枚1組でなければならない。
- ・暴力は禁止！！

4 製品

- ・長方形 $8\text{cm} \times 13\text{cm} \times 3\text{枚} = 3\text{万円}$
- ・正三角形 一辺が9cm $\times 3\text{枚} = 5\text{万円}$
- ・分度器 配られた大きさ $\times 3\text{枚} = 5\text{万円}$
- ・円 直径9センチ $\times 3\text{枚} = 15\text{万円}$

子どもたちの気付きや感想

- ・私たちの国は、最初はとても豊かでした。しかし、次第に貧しくなっていました。最初は豊かだったから、色々なものが作れたけど、貧しくなると少ししか物が作れませんでした。今までは、貧しい国の人のことをあまり考えたことがなかったけど、この貿易ゲームをやったおかげで、他の国の人のことが少しわかったような気がします。
- ・貿易ゲームを通して、貿易の大切さがわかりました。豊かな国と貧しい国を経験できたので、様々なひとの気持ちがわかりました。
- ・私たちの国は加工貿易を行いました。資源・技術の意味がわかりました。
- ・貿易は本当に大変だということがわかりました。大変ですがなくてはならないものだとも感じました。

◆ 授業の詳細

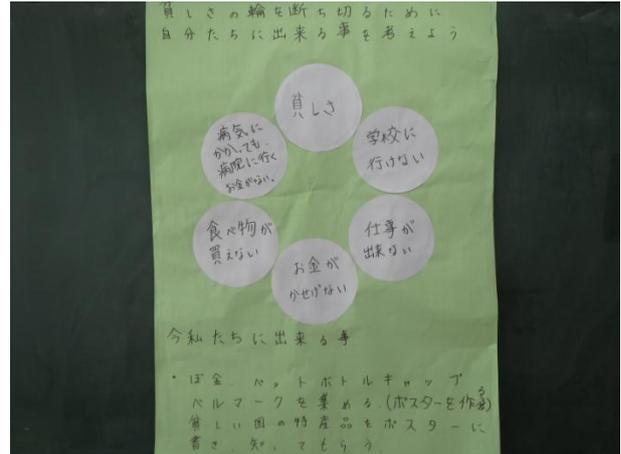
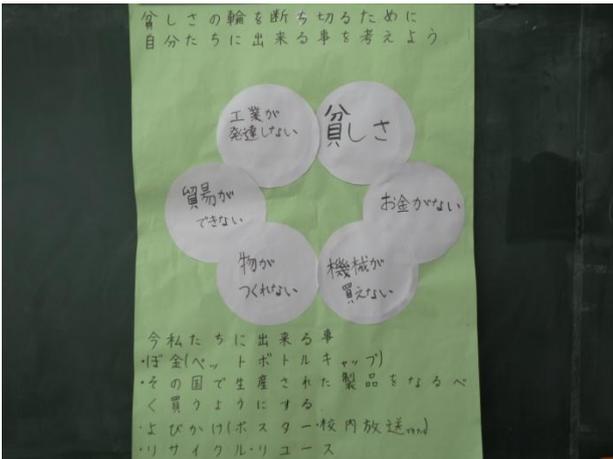
8時間目 「貧しさの輪から抜け出す方法を考えよう。」

授業の導入の部分で、**先進国**、**開発途上国**の2つのカードを提示し、それぞれの言葉が持つイメージを発表する。

開発途上国という言葉からは、貧しさにつながる言葉が出てきたので、それでは今日は貧しさについて考えようということ子どもたちに伝える。学習問題は「貧しさの輪を断ち切る方法を考えよう」である。

まず、6枚のカードを配る。その6枚のカードの1つには、「貧しさ」と書いておく。そのカードを出発点として、貧しいからどうなるのかということ、班ごとに考えていく。(例) 貧しい→学校に行けない→能力が身に付かない など

貧しさの輪が完成したら、その輪から抜け出すために、今自分ができることを話し合う。班で意見を交わした後に、クラス全体で考え方を共有する。それぞれの班が「貧しさの輪」に気付くことができ、貧しさから抜け出せないのは、1つの要因だけでないことを理解した。



子どもたちの気付きや感想

- 本当の貧しさとは何か考えさせられました。JICAのおかげでそのように考えることができました。ただ、本当の貧しさとは、僕には何もできないことなのかもしれません。
- 貧しさの輪を少しでも断ち切れればよいかと思い、みんなでアイデアを考えました。ユニセフ募金やペットボトルキャップ集めは有効ではないかと思いました。



一生忘れないであろう、仲間とともに

◆ 成果と課題

「タンザニアといえば？」この問いから私のタンザニアの学習が始まった。タンザニアの空港に着けば、赤土の大地が広がっている。車はあまり走っておらず、人力車やバイクタクシーがたくさん走っているだろう。今考えれば、恥ずかしくもなるが、私を含めて日本人の多数が同じような考えをもっているに違いない。

実際のタンザニアからはパワーを感じるというよりも、むしろ町中が醸し出す落ち着きのようなものを感じた。それはタンザニアという国が、西洋の文化を取り入れ、我々と同じ社会形態で生活しているからなのかもしれない。

課題としては、私は社会科を専門の教科としているので、もっと「人」に焦点をあてた授業を構成するべきであったと反省している。タンザニアで生きる人々の生きざまに、心を揺り動かされるような授業を作ろうと現在考えている。

この研修では、子どもたちに多様な価値観を身につけさせたい。そして、同じ地球に生きる仲間として、国籍もなければ、人種もないということ気付いてもらえれば、この研修は成功であると自分に言い聞かせ研修に臨んだ。実際にタンザニアという国は、多様な価値観を育むための生きた教材の宝庫であり、車内から街中を見るだけで、知的好奇心をくすぐる物ばかりであった。今回はイリングで勤務する満永隊員のおかげで、スカイプ授業という画期的なことを行い、タンザニアと横浜の子どもをつなぐことができた。子どもたちはきっと忘れられない思い出になったであろう。今回の研修の効果がすぐ子供たちに現れるかはわからない。もしかしたら、大人になった時に、「そういえば小学5年生の時にタンザニアの小学生と交流したな。」と思い出し、「大人になった自分だからこそできる支援をやってみよう。」または、満永さんのことを思い出し、「青年海外協力隊員になって開発途上国の人たちのために頑張ろう。」ということに繋がってくることも考えられる。支援には即効性のあるものも必要であるが、時間が経過したときに効果が表れてくるものも必要である。我々教員はきっと後者の人材を育てているのだろうと、この研修を通じて考えさせられた。

◆ 参考資料:新・貿易ゲーム

開発教育協会・かながわ国際交流財団